

## 共同研究の経緯

# 東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史

——民具資料の文化資源化——

研究代表者 角南 聡一郎

### 1. はじめに

本書は、研究課題「東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史」による共同研究の成果である。ここでは本共同研究の経緯を、本共同研究班がどのような目的で組織されてきたか、またどんなメンバーによって構成されているか、共同研究の経過、そしてどのような成果が得られたかの順で簡潔に紹介する。

### 2. 共同研究の目的

仔細に個々を観察すると日本の民具・物質文化の多くは、中国からの直接的・間接的影響や移入から生まれたものであることがよくわかる。このような背景を勘案すると、日本の民具・物質文化研究の一つのアプローチとして、広く東アジアを概観し、素朴にモノとモノを突き合わせて比較するという手法は、目新しいというわけではない。今から百年以上前に、鳥居龍蔵が歩いた空間はまさにこのエリアであったし（図1）、民具・物質文化の収集もおこなっている。いわばこれがご先祖様のようなものである。しかしながら、国境という壁により鳥居のようなフィールドワークはなかなか一人でフォローできるものではない。そこで共同研究をおこなうという必然性が生じる。けれども、このようなスタイルで様々な分野の研究者が、モノを相手に喧々諤々と議論をおこなうというプロジェクトは、近年はあまり活動していないのではなかろうか。

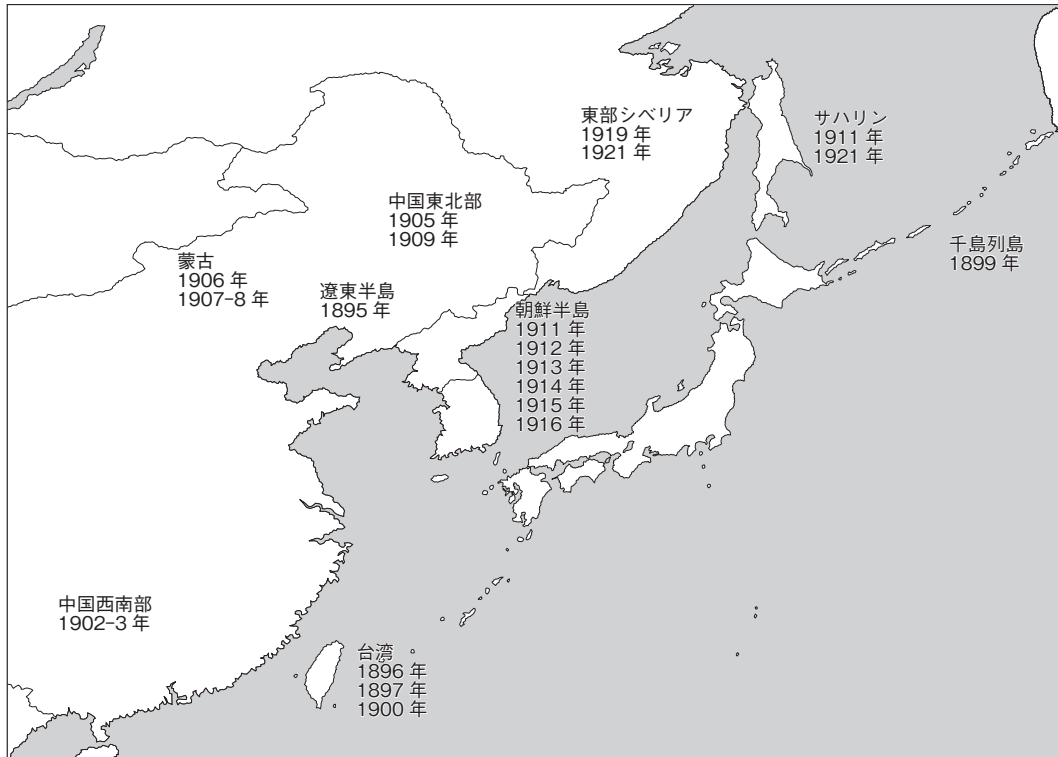
そこで本共同研究では、日本と中国・韓国の民具・物質文化を民俗学・考古学・文化人類学といった視点から比較し、共時的に両者の共通性と差異性を明らかにしようとしたものである。

対象とすべき資料の中心には、常に戦前に収集されたアチックミュージアムのコレクションを据えて、その前後の変化を中心に検討しながら、物質文化から見た中国・韓国と、日本との比較研究を試みる。

この共同研究によって期待される成果としては、次の三点があげられるだろう。第一に、それぞれの国・地域における民具・物質文化の共通要素と差異を可視化することにより、それぞれの文化の歴史的、経済的関係性を明示することができ、個々では認識することができないダイナミックな東アジアの歴史像を描くことができる。

第二に、アチック資料を起点として経年変化を探ることにより、民具・物質文化の変化する部分としない部分を抽出することが可能となり、常民の心性の中で比較的变化しやすい部分と、かたく

図1 鳥居龍蔵が調査を行った地域



なに変化を拒む部分とを明らかにすることができる。これは各国・各地域の独自性や民族性を明らかにすることにもなる。

第三には、近現代社会における人の移動や交流によって、移民先でどのように民具・物質文化が変化していったかについて検討をおこなう。これにより、世代間による「故郷」に対する意識の差異や、現地への適応過程を明らかにすることができる。この点は、グローバリゼーションにより人の流動性が加速されて、コンフリクトの形成やトラブルの発生といった、社会問題の解決策を模索することについても貢献することができると考えられる。

東アジアの民具及び物質文化について、基礎的研究と応用研究の二つのアプローチにより調査研究を実施する。これらは、資料の「過去」と「現在」の様相を比較するためには、好資料であるといえよう。

ここでいう基礎的研究とは、アチック資料という戦前期に日本をはじめとし、広く東アジアで調査収集された、民具・物質文化に関する情報や資料の履歴を精査することにより、その歴史的意義を明らかにしようとする作業である。

また応用研究とは、共同研究メンバー各自のテーマに基づいて、実際に中国、韓国、台湾などにおいてフィールドワークを実施することを指す。ここで、各メンバーは、アチック資料に含まれる民具・物質文化の「現在」や「過去」の様相について、コレクターの存在形態、民具・物質文化に対する意識と知識といったテーマで、アチック資料を基準として、モノ自体やそれにまつわる情報について、以前・後のフィールドワークをおこなう。以前とは考古資料や歴史資料を指し、以後とはアチック資料収集以後の社会変化に伴う、モノ及びモノに対するネットワーク、認識の変化に着目し、アチック資料を歴史の流れの中に位置づけることを目的とする。

### 3. 共同研究メンバー

共同研究メンバーを選出するために、留意した点が二つある。一つは前述したように、多分野にわたって東アジアを対象としてフィールドワークをおこなっている研究者である点である。もう一つは、一部を除き物質文化研究を専門とするものではない研究者であるという点である。こうした共同研究が物質文化研究者のみによって組織されることが、従来のパターンであったろう。しかし、それは「いつもの」「ありきたりの」答えが得られると考えられがちで、共同研究のスリリングさや、そもそも共同研究をする意義が見出せなくなる。そこで筆者は、物質文化研究者ではない研究者がモノと向かい合ったならば、専門の研究者とは異なった物質文化のメタな側面を抽出することができるのではないだろうかと考えた。このように様々な立場から同じモノを見つめることによってこそ、新たな民具・物質文化研究の地平が拓けるのではなかろうか。モノ研究はモノ研究者のみでおこなわれているとの観念が独り歩きするようでは、いつまでも「真の」モノ力（material agency）の魅力を広く文化に関する研究をになう人々に知ってもらうことはできないだろう。

そこで、以上のようなある種の「こだわり」により、2009年度、角南聡一郎（元興寺文化財研究所／民俗学・物質文化研究）をプロジェクトリーダー、小熊誠（神奈川大学／民俗学）をプロジェクト・サブリーダーとして、以下のメンバーにより共同研究班が組織された。太田心平（国立民族学博物館／社会文化人類学・北東アジア研究）、何彬（首都大学東京／民俗学）、朽木量（千葉商科大学／歴史考古学・物質文化研究）、蔡文高（國學院大學／民俗学）、志賀市子（茨城キリスト教大学／文化人類学）、芹澤知広（奈良大学／文化人類学）、槇林啓介（愛媛大学／考古学）として組織された。

メンバーそれぞれのフィールドは、小熊、何、蔡、槇林は中国を、志賀は中国・台湾を、角南は台湾、沖縄を、芹澤はベトナム、香港を、太田は韓国を、朽木は日本・沖縄である。

基本的には、各メンバーの海外フィールドにおいてフィールドワークを実施した。この調査成果を年2回の研究会で報告し、メンバー間で議論をおこなった。また、2012年度からは、韓国をフィールドとする鈴木文子（佛教大学／文化人類学）、中国をフィールドとする中尾徳仁（天理大学附属天理参考館／民国時代の中国民具研究）をメンバーに迎え、論議を重ねている。

### 4. 共同研究の成果

本共同研究によるこれまでのまとまった成果としては、2010年12月11日に神奈川大学で開催された、第2回国際シンポジウム「“モノ”語り—民具・物質文化からみる人類文化—」で「民具からみる東アジアの比較文化史」という名でセッションをおこなったことである。セッションでは、槇林が「『中国』文化形成の多様性と基層性」、小熊が「沖縄と福建における亀甲墓をめぐる比較研究」、朽木が「現代民具に『消費者の生産』を読む」と題して発表をおこなった。

本シンポジウムには発表者以外にもメンバー全員が参加し、活発な論議をおこなった。特に民具・物質文化を同じくテーマとする、他班のメンバーとの交流がなされたことも大きな収穫であった。

## 5. 本書に納められた成果

研究成果を本書にまとめるにあたって、各メンバーの成果をメンバー間だけの議論に終わらせず、小島摩文（鹿児島純心女子大学）、加藤幸治（東北学院大学）という、物質文化を専門とする気鋭の研究者にコメントしていただくことにした。その理由は、本共同研究の成果として得られた物質文化研究のメタな側面を、改めてこの立場から眼差すことにより、学問の中でそれらを位置づけることが可能となるからである。このため、両氏には2011年度と2012年度の二回にわたり、共同研究会に参加していただき、メンバーの成果報告に対してのコメントをしていただいた。

以上のような経緯により本書は完成に至った。本書は時間軸に沿って、第Ⅰ章 先史から前近代（槇林・角南・小熊）、第Ⅱ章 近代（鈴木・太田・朽木）、第Ⅲ章 現代（中尾・何・芹澤・志賀）、そして最後に第Ⅳ章として小島・加藤両氏によるコメントという構成となっている。

読者は、各論考の中でどのように民具・物質文化が取り扱われているか、それらを用いて各自が何を語ろうとしているのか、もしくはモノに何を語らしめようとしているかに留意して読み進めていただければ幸いである。各論文を読者にエリアや時代を超えて、読み比べていただくということも、本書のモノ研究の新たな可能性を知っていただくということになるのではないかと期待している。

---

## 参考文献

---

- Arthur Asa Berger 2009 *What Objects Mean: An Introduction to Material Culture* Left Coast Press  
Henry H. Glassie 1999 *Material culture* Indiana University Press  
加藤幸治 2012 『紀伊半島の民俗誌：技術と道具の物質文化論』社会評論社  
小島摩文 2010 「ペットボトル以前の事」『月刊みんぱく』392 pp. 8-9  
野林厚志 1997 「鳥居龍蔵の乾板写真術」『精神のエクスペディション 学問の過去・現在・未来第二部』東京大学出版会 pp. 90-96

---

## 図版典拠

---

図1 野林 1997より作成

## 共同研究者・研究協力者一覧

共同研究職分	氏 名	所属機関	専 門	所属期間
2. 民具資料の文化資源化				
2-2 東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史				
代表者	角南聡一郎	元興寺文化財研究所	民俗学、考古学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
副代表者	小 熊 誠	神奈川大学	民俗学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	太田 心平	国立民族学博物館	社会文化人類学、北東アジア研究	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	何 彬	首都大学東京	民俗学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	朽 木 量	千葉商科大学	歴史考古学、物質文化研究	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	蔡 文 高	國學院大學	民俗学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	志賀 市子	茨城キリスト教大学	文化人類学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	鈴木 文子	佛教大学	文化人類学	2012. 5. 1 ~ 2013. 3. 31
共同研究者	芹澤 知広	奈良大学	文化人類学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	中尾 徳仁	天理大学附属 天理参考館	民国時代の中国民具研究	2012. 5. 1 ~ 2013. 3. 31
共同研究者	槇林 啓介	愛媛大学	考古学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31

共同研究職分	氏 名	所属機関	専 門	年 月 日
研究会参加者 「4-1 アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」共同研究者	小島 摩文	鹿児島純心女子大学	民俗学・民具学	2011. 11. 19 ~ 2012. 9. 30
研究会参加者 「事業運営の総合的推進」業務研究協力者	加藤 幸治	東北学院大学	民俗学	2011. 11. 19 ~ 2012. 9. 30